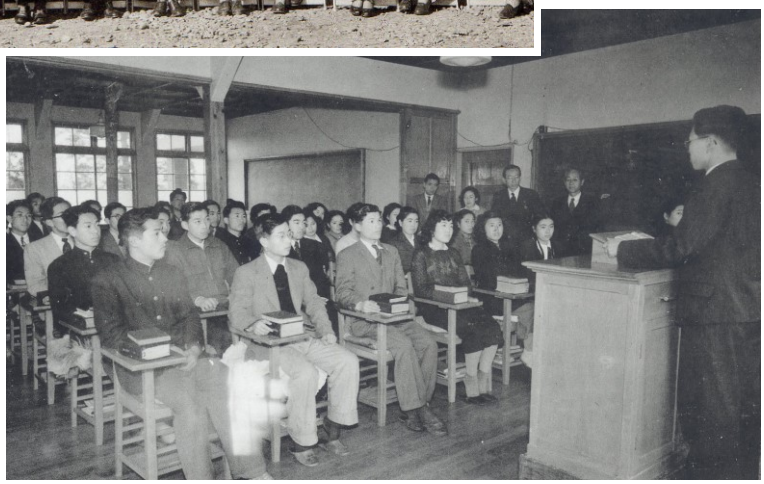
◀第１期生



▲CBI チャペル（1954 年）

▲第 67 回卒業生
（2017 年）

◀第 67 回卒業式
（2017年）

▲CBC フェスタ講義風景(2017 年)

▲CBC フェスタ礼拝風景(2017 年)

▲CBC フェスタ模擬店風景(2017 年)

ごあいさつ

中央聖書神学校
北野耕一

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の創立総会が滝野川神召教会（現神召キリスト教会）において開催され、その席上、ジョン・クレメント宣教師が「神学校の建設」を強く主張されました。総会はその提議を受けて、「神学校建築委員」を設立しました。クレメント師が委員長に、初代教団理事長弓山喜代馬師、そして太平洋大戦中も帰米せず主に仕えたジェシー・ウエングラ宣教師がそれぞれ神学校建築委員に選任されました。それが 1949 年 3 月 15 日のことです。委員の篤い祈りのうちに、土地の選定に東京、横浜を奔走し，「ここだ！」と行き着いたのが、駒込の高台現在の敷地でした。そこは門柱以外，戦火ですっかり焼け果てた松平家のお抱え屋敷跡でした。一般人が所有することの不可能であった駒込三丁目 15－20 番地（1700 坪）が与えられたのは，主なる神の介入によるといわざるを得ない天来の奇蹟の業でした。直ちに整地作業に入り、建築工事にとりかかりました。何と 7 ヶ月の短期間に土地の登記から、校舎と学生寮の建築、構内の造園のすべてを完了、10 月末に竣工式を行いました。そして神召教会内の聖霊神学院在籍者 10 名が新校舎に移住し、学びを始めたのです。翌年 13 名の新入生を迎え、4 月 20 日に「中央聖書学校」（CBI）と命名された神学校が発足いたしました。そして、8 月 4 日に東京都知事から「各種学校」の認可を得て今日に至っております。『漁人』に記載されているように、第 1 期卒業生の第 1 号卒業生が伊藤顯榮師です。伊藤師は三代目の教団理事長に就任されました。弓山師は 1973 年に理事長・総理を退任されるまで聖書学校校長を兼任され、1991 年に神学校を退職されるまで 42 年間校長の重責を負われました。

その後、佐布正義校長を迎え、これまで 3 年制であったカリキュラムを 1978 年に 4 年制のカレッジレベルに引き上げ、1999 年には中央聖書神学校（CBC）と改名しました。その間 1987 年，1988 年に関西分校、関東分校を開校し、神学教育の枠を広げました。これらの分校は通信科の設置 2008 年まで続けられ，教団の標語「宣教力 Up」に大きく貢献したのはいうまでもありません。その後教師のたゆまない研鑽の努力が稔り、CBC のカリキュラムをレベルアップできる教育環境が整いましたので、研究科と本科に牧会学修士課程を導入することにし、アジア神学協議会の審査申請をいたしました。その結果 2014 年に CBC に設置した牧会学修士課程（M.Div,），神学士（B.Th.）課程、通信科ディプローマ（Dip.）課程など全てが認定され、中央聖書神学校の研究科、本科、通信科が国際的にも認知されることになりました。また，2005 年にはろう者聖書学校を開校、一時中断しましたが、2013 年に再開、すでに 5 名の卒業生を送り出し、6 名の学生が在籍し学びを続けています。春は桜、初夏は紫陽花、秋はもみじと四季それぞれの装いに恵まれてきたキャンパスは今も変わっていません。同窓の先生方にとって母校である中央聖書神学校を訪れる機会が少なくなりましたが、委員会や総会以外の折にでも是非キャンパスに足を運んでいただき、チャペルに出席して学生を励まし、食事を共にして学生との交わりを深めていただければ幸いです。また、全国諸教会への牧師・伝道者の継続的に送り出すことは、教団・神学校の喫緊の課題となっております。是非、同窓会の皆様のご協力により、教団の未来を担う献身者がさらに多く「駒込の山」に集められるようにお祈り・活動くだされば幸いです。祝福を祈りつつ。

「ますます開かれた神学校を目指して」

『そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。 だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」』
マタイの福音書九章三七、三八節

細 井　眞

同窓会の方々におかれましては、中央聖書神学校（以下、神学校）のためにお祈りくださり、お捧げくださりありがとうございます。

さて、現在の日本のキリスト教界を概観しますと多くの教会で教職信徒の高齢化が進み、多くの無牧の教会が見られ、教会員数の減少も著しい状態です。幸い日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（以下、教団）の無牧教会はまだ少数ですが楽観はできません。事実、多くの教会の教会員数は横ばい状態であり、減少している教会も見られるからです。一方、成長している教会も見られる様になりました。一世代前に教会員数が一〇〇名を超える教会は一〇教会もありませんでしたが、現在は三〇教会を数えるようになりました。さらに、一〇〇〇名、二〇〇〇名を超える教会が出現しています。

このような中、急務とされるものは、教職者養成であり、信徒リーダーの養成です。神学校では、二〇〇八年から通信科が、二〇一四年から教会献身者コースが開設されました。喜ばしいことに入学者数は年々増加傾向になりつつあります。しかし、寮生活を伴う本科生の入学者を得ることには毎年大変苦労をしている状態です。

多様化する現代社会の中にあって、主の働きを共に担う方々を、如何に門戸を広げて神学校に加わっていただくかは大きな課題です。聖会で、修養会で、キャンプで献身者が与えられても、献身を決意した方々の神学校入学には多くの困難があります。神学校を選ぶ時には、自分の状況や要求とすり合わせて、より便利な道を決断していきます。その時、教団の教育機関でなく、超教派の神学校を選択する方々が増えていけば、ペンテコステ信仰の根幹が揺らいでしまいます。このような状況から神学校は『ますます開かれた神学校』となっていく必要があります。さらに、牧師伝道者養成だけでなく、ペンテコステのリーダー的存在である教団にふさわしい、より高度な神学教育をも目指すことを視野に入れなければならないと考えています。

これからも、神学校への継続的な献金と共に、次世代を担う方々が神学校に送られるようご協力、お祈りくださいますようお願いいたします。

海外在住会員からのお便り

―荒井喜孝先生（17 回生）からの手紙－

杉浦先生

初めて御便り致します。私は CBC17 回卒業生であり、現在カリフォルニアで日本語教会牧師をしています。こちらに来て 32 年になります。その間絶えず「漁人」を御送り下さり、ありがとうございます。牧会とともに和食レストランを経営（十店、従業員千名）しております。

この度、引っ越しましたので御連絡いたします。今後も「漁人」の送付を御願い申し上げます。もし小生が役立つようなことがある時は、喜んでさせていただきます。尚、私の妻は 18 回卒業生宇良田小路です。結婚して 50 年、74 才となり、孫たち 9 人に囲まれて恵まれた日々をすごしております。

カードを同封いたします。（上の名刺）

荒井孝喜
Aug.6.2017

杉浦先生

ていねいな御便りをありがとうございます。御忙しい中から、同窓会の詳しい様子を御知らせくださり、読みながらかつての尊い学びの日々を思い出させてもらいました。アメリカに住むようになり 30 年がすぎました。主の不思議な御導きを感謝しない日はありません。主イエスの招きを受けて献身し、CBC で訓練されたこと、それがすべての祝福の源です。以来、50 年牧会とビジネスの奇跡の中をすごしてきました。

こちらに来た頃、日本語牧師は六人ほどいたのですが、今は私ひとりです。五人の通訳者を用いて礼拝を守ります。どうしても英語の人が加わるからです。そういうわけで少し忙しくしており、訪日はなかなかできません。五年に一度とか招かれることはありますが、それもよっぽどのことがある場合です。すでに孫たちがビジネス（レストラン）に加わりつつあり、私も 75 才になります。ここ 50 年病気したこともなく、健康いっぱいで週に二回ゴルフを楽しんでいます。E メールとか全くしないので、すべて私の秘書（娘・日本在住）がやってくれています。

そういうわけで、「思い出」のこと、御返事ができずにおります。会費はおいくらでしょうか。喜んで送金させていただきます。後日私の娘からそちらに E メールが届くと思います。どうぞ、娘を通して御連絡くださいませ。

「人生はハッピーロール」は、私の自伝小説です。（いのちのことば社）。でも、もう在庫はないと聞いております。残念です。

とりとめのないお手紙になってしまいました。御ゆるしください。（かつてのクラスメイトに会いたいなあ！ひとり言です。）

2017 年 10 月 18 日
荒井孝喜

「二人の献身者」

岩見沢神召キリスト教会　中山規夫

この度、二人の献身者を送り出すことになった経緯について、お証をすることになったのですが、特別な理由が見つかりませんので、私なりに感じている事柄についてお話したいと思います。２０１５年４月に長男(中山雄神学生)が献身し、翌年の２０１６年４月に次男(中山満神学生)が長男に続いて献身しました。

ところで、長男が生まれたのは１９８８年です。その年に教会では地域に根ざした宣教の一環として三才児を対象とした幼児教室を週に二回行いました。子供たちは皆、三才になる前から保育を兼ねて幼児教室に参加することになりました。その幼児教室で子供たちは教会学校の延長のように礼拝の時を持ち、そのあと幼児たちと工作などをして交わる時を持ちました。幼くても教会の貴重な戦力でしたので、教会のためにできることをさせ、また祈りとみ言葉の暗唱に努め、小学校に入学すると同時に聖書通読と早天祈祷を行わせました。このような中で子供たちの信仰は年を重ねる毎に少しずつ成長し、教会の力となりました。

特に雪の多い岩見沢において、１２月から３月までの四ケ月間、毎年除雪がありますが、子供たちは幼い時から労力を惜しまずに協力してくれました。「三つ子の魂百までも」という諺がありますが、幼い頃のこのような生活習慣が土台となったのでしょうか。

さて、長男はこれまでに教区の聖会やキャンプなどで献身の招きがある度に献身表明をしていました。そして２０１４年四月に長男から「来年献身します」と告げ知らされました。私は自分の献身については「人生における最高の道である」と実感しているのですが、子供の献身となると、「宣教における霊的な戦いや限られた経済生活に耐えられるのだろうか」と心配になりました。しかし長男は献身を表明すると早速、札幌の会社の近くにアパートを借りて献身者として準備を始めました。私は教区会の時に先生方に「長男が献身することになりました」と伝えますと、ある牧師から祝福の言葉をいただきました。しかし私は「教会の貴重な戦力を一人失う

ことになります」とつぶやきました。すると牧師は「神様はきっと代わりの人を与えて下さいますよ」と励まして下さいました。

一年が過ぎて２０１５年３月に長男が献身のために会社を退職しました。その際、職場でお別れ会が持たれ、その時に長男が「牧師になるために会社を辞めることになりました」と証しをしました。するとそれを聞いていた札幌在住の女性が、同じ３月に長男と入れ替わるようにして教会に来られました。その日以来、毎週忠実に札幌から岩見沢の教会まで通って来られました。そしてその年の８月に洗礼を受けて私たちの教会員になりました。その姉妹が洗礼式の時にこのように証しされました。「私はクリスチャンになりたいと思っていたのですが、お別れ会の時に彼の証しを聞いて、彼の教会に行けばよいのだと思いました。それでこの教会に通うことにしたのです」教区会で牧師からいただいた励ましの言葉の通りになりました。

その一年後に今度は次男から「来年献身するために９月限りで仕事を止めます」と告げ知らされました。２０１６年からは二人の社会人を献身者として送り出すことになりました。それに加えて三男が一年前の２０１５年から大学生となってアパート生活を始めていました。教会にとって宣教の面においても経済面においても犠牲を払うことになりました。

それから二年が過ぎて２０１８年を迎えています。４月には長男がＣＢＣを卒業する予定です。そして来年には次男が卒業することになる予定です。二人の献身について、初めは歓迎できるような心境ではありませんでしたが、長男の献身から三年が過ぎようとしている今にしてようやく二人の献身者を送り出せたことを喜べるようになりました。これも「妻の支えと教会員の皆さんの祈りと支援があったからこそ果たせた」と実感しています。ここまで守り、導いて下さった神様に心から感謝してお証致します。